

# 超 音 波 検 診

## 動 向

腹部超音波検査は、腹部の肝臓、胆嚢、腎臓、膵臓、脾臓における疾病の早期発見に役立つばかりでなく、これらの臓器以外にも、大動脈、膀胱などの臓器を観察することができ、多様な所見内容で疾患を発見できる検査である。

超音波の持つ直進性や指向性、媒質の変化による反射や屈折などの性質を利用する本検査は、放射線被曝の心配や検査に伴う苦痛もなく、安全かつ有用な検査として定着し近年、生活習慣病予防健診の付加項目として受診するケースも多く見られる。

産業保健分野における受診者数は、表1に示したとおりである。平成17年度は受診者数において前年度比966名増の10,020名となった。

受託団体はその殆んどが毎年の依頼であるが、検査の必要性が理解され新規受託も順調に推移し、5年連続しての受診者数の増加となった。

当協会では熟練した超音波指導医（日本超音波学会）の知識と経験をもとに生活習慣病予防健診などの併用や有所見者の精密検査の実施、高次治療機関との連携による最新医療を踏まえた検診処理を実施している。

今回、新設された集団検診部門の超音波検査師試験に当施設の超音波技師3名が合格し、尚一層の精度維持に貢献が期待される。

## 方 法

腹部超音波検査は可聴域外の音波（3～4MHz）を対外より体内に発射しその反射を画像化することにより得られる情報で診断する装置である。この検査は腹部の実質臓器（肝臓、膵臓、脾臓、腎臓）、胆嚢、腹部大動脈、さらにはリンパ節、膀胱、前立腺、腸管等腹腔内の様々な臓器の状態を把握すること可能である。検診では実質臓器と胆嚢及び腹部大動脈を検査の対象としている。

### A. 検査前の注意

- ①前夜9時以降の飲食をせずに午前中に検査する。
- ②午後に検査を行う場合には胆嚢が収縮することを考慮して牛乳、卵、油ものを避けて通常の半量の朝食を摂ってもらい検査まで6時間の絶食とする。
- ③消化管のバリウム検査は数日前から実施しない。
- ④胃X線や内視鏡を同日に試行する場合には臓器の抽出状態を考えて超音波検査を先に行う。

当施設では検査に先立って下剤等の薬物投与ならびに浣腸等の前処置は行っていない。

### B. 検査の実際

- ①受診者は背臥位で腹部を露出し、検査者は受診者の右側の装置に向かって座る。

- ②腹部全体にゲルを広く塗布し、探触子を受診者の皮膚に密着させ腹部の臓器を観察しながら記録する。

### C. 判定

技師により画像をすばやく適切に判断すると同時にフィルムを撮影し専門医とディカッションしながらダブルチェックで最終判定を下している。尚判定に際しては、前回受診歴を確認し前回所見並びに精検所見などを考慮して判定を下している。

## 結果、考察

平成17年度は前年に比べ男女とも受診者数の増加をみた（表1）。依頼団体の減少も無く経年受診者が多く当施設の超音波検診に対する取り組みが評価されてきたものと思われる。

判定内容の内訳を見ると要医療となる要精密検査群、要受診群、主治医継続群は全体で6.8%であり、それ以外のなんらかの所見を有する群は全体の72.3%と昨年と大きな変化を認めなかった。

臓器所見内容（表3）を見ると胆嚢ポリープ、脂肪肝、肝嚢胞、大動脈石灰化といったいわゆる“生活習慣病”に関連する頻度が高かった。悪性腫瘍との鑑別が必要な胆嚢腺筋腫症、1cm以上の胆嚢ポリープ、肝血管腫を含む肝腫瘍、膵嚢包、膵管拡張、腎腫瘍といった症例の拾い上げ、悪性腫瘍ではないもの場合によっては治療が必要な胆石、胆泥、肝繊維症、膵石灰化、水腎症といった症例の拾い上げは例年どおりおこなった。

現在当施設では試行錯誤しながらこれらの 1)生活習慣病関連の症例群 2)悪性腫瘍との鑑別を含む要精検群 3)悪性腫瘍以外の要精検群 4)現時点では病的意義のない要観察群に分類分析し可能な限り各事業所の要望に対応しながら最新医療事情を考慮した検診処理を行っている。

腹部超音波検査はその有用性は認知されるも、その対症臓器の数と所見の多彩さで産業保健分野においては‘的’が絞りにくく一次元的な検診にはなじみにくい側面を併せ持っている。当施設ではこの合い矛盾する側面に真摯に取り組み試行錯誤しながら精度向上を目指している。

尚、当院では熟練した超音波指導医の下に検診判定並びに検診処理を実施しているが、今回当施設の超音波検査技師3名が新設された集検部門超音波検査師試験に合格した。今後もたゆまぬ研鑽努力を惜しまずこの困難な検診の精度向上をめざしたい。

関係の集計表は77頁に掲載